

1 本研究の経過

2003 年度の研究経過

(1) 第 3 回研究会

2003 年 6 月 28 日～29 日、京都大学で開催され、以下のような発表がおこなわれた。

出席者（敬称略）：清水靖夫・石原 潤・田中宏巳・長岡正利・田村俊和・源 昌久・久武哲也・長谷川孝治・長澤良太・村山良之・内田忠賢・堤 研二・上田元・山近久美子・今里悟之・宮澤 仁・渡辺信孝・山村亜希・大浦瑞代・谷屋郷子・加藤敏雄・古川恭一・小林 茂・鳴海邦匡

<6 月 28 日（土）>

13 時 30 分より、京大会館にて開催され、以下のような発表が行われた。その際、新たに発刊された『東北大学所蔵外邦図目録』



写真 1: 京都大学東南アジア研究センターに所蔵される外邦図の見学（中央が河野京大東南ア研助教授）

（A3 版、244 頁）が披露された。また、その間に、京都大学東南アジア研究センターに所蔵される外邦図について、河野泰之同センター助教授の案内のもと見学した。この際、同センター所蔵の外邦図一覧ともいえる「帝国陸海軍作成地図一覧」（全 8 頁、英文）を配布していただいた。

1. 長岡正利〔国土環境（株）もと国土地理院〕外邦図作成の記録としての各種一覧図／地理調査所における外邦図の扱い、ほか」（話題提供）

まず、外邦図一覧図について、その作成の経緯と現在の所蔵状況について報告された。そして、国土地理院所蔵の「外邦図目録」とともに、旧地理調査所に所蔵されていた外邦図の由来と、その後の扱いについて紹介された。

ここでとくに検討されたのは、敗戦前後の地図をめぐる状況で、関係者からの聞き書きから、空襲による被害、疎開、終戦時の焼却、さらに米軍による接收と返却のプロセスが示された。敗戦後米軍施政下におかれた地域（沖縄・奄美・小笠原）については、施政権の返還のたびに接收された地図の原図も返却されたという点は、米軍の旧日本軍作製の地図に関する政策を考えるに際し、大きな意義をもつと考えられる。

その後の質疑のなかで、上記の一覧図を見比べることで地図作成の進展を知る

ことが可能なことにくわえ、旧陸地測量部の設置した三角点や測量データの継承について、台湾と韓国ではちがいがあることなどが指摘された。また、関連する多くの地図や文献資料を提示していただいた。



写真 2：長岡氏による報告

2. 田中宏巳（防衛大）「陸地測量部等地図の行方」

まず敗戦前の陸地測量部の疎開、さらに敗戦時の地図（原図）の焼却、米軍による接收などの事情について、関係者の証言（防衛研究所所蔵資料）よりくわしく紹介された。また、地理調査所からその後自衛隊 101 測量大隊（現中央地理隊）に移管された外邦図の概要についての調査結果を報告された。さらに海外に所在していた日本軍の主な測量機関の第 2 次大戦時～終戦時の活動について、関係者の証言資料（防衛研究所蔵）により検討され、とくに終戦後における地形図や資料の引継の状況について紹介された。

その後の質疑では、特に研究を進めるうえで必要となる資料の所蔵機関につい

て、例えば、ロンドンのインペリアル・ウォー・ミュージアム、レニングラード国立公文書館（関東軍関係の資料）や防衛研究所戦史部などを教示していただいた。また、復員省関係の資料は、聴き取りした資料が大量に存在するものの公にされていないことを指摘するとともに、自衛隊中央地理隊に保管されている外邦図資料の調査の難しさと緊急性についても触れられた。



写真 3：田中氏による報告

<6月29日（日）>

9時00分より、京都大学総合博物館地図室にて開催され、以下のような発表が行われた。また、これらの報告の後に、今後の予定について打ち合わせを行い、そして、京都大学文学部地理学教室に所蔵される外邦図について、山村亜希同博物館助手の案内のもと閲覧した。

3. 渡辺理絵（大阪大・院）・小林 茂（大阪大）：「清国陸軍学生と陸地測量部修技所」

今世紀初頭、陸地測量部修技所に在籍していた清国陸軍留学生らを撮影した写真（大阪大学文学研究科人文地理学教室所蔵）を主な題材として、アジア歴史資料センターで公開されている近代資料などを参照しつつ、清国陸軍留学生の受け入れの経緯や、留学生らのその後の役割（辛亥革命などへの参加、中国の測量学校校長などへの就任）について報告した。

その後の質疑では、日中相互における地形図の類似性について意見が述べられたほか、田中氏より、日本から中国側に「教習」が派遣されていたこと（高等師範学校校長嘉納治五郎などが仲介、陸軍からも）が指摘された。



写真 4：小林による報告

4. 堤 研二（大阪大）：「兵要地誌と宗道臣（少林寺拳法開祖）の生涯」

兵要地誌や外邦図の作成をめぐる情報収集の活動について、少林寺拳法の開祖である宗道臣との関係から報告した。宗道臣は、土肥原機関の兵要地誌班員として情報の収集にあたるが、その活動の過程で中国における拳法の達人に技術を習

い少林寺拳法を大成させたという。

その後の質疑において、田村氏より、こうした情報の提供は口述で提供されたものであったこと、田中氏より、大本教との関係の存在について指摘された。



写真 5：堤氏による報告

5. 源 昌久（淑徳大）：「地図資料の用紙劣化対策についての一提言」（話題提供）

まず、外邦図資料の劣化、特に用紙の酸性化の問題に関して、その原因を指摘したうえで、資料の保存方法について報告した。そして、外邦図資料自体の脱酸化処理と、資料を保存する環境の整備の必要性について指摘した。ちなみに、こ



写真 6：源氏による報告

うした処理を東北大学で所蔵する外邦図資料に施した場合、その予算として4千万円以上が必要になるという。

その後の質疑では、各所蔵機関（東北大、地理院、神戸市博など）における収蔵の状況について報告があった後、田村氏より、資料の効率的な保存と活用を目指すために、外邦図資料の所在目録を全国的に整備することの必要性が指摘された。

<協議内容>

以上のあと、これまでの活動の報告や、今後の研究の打ち合わせをおこなった。その内容は、以下の通りである。



写真7：京都大学総合博物館収蔵の外邦図の閲覧

報告

1) 国内の資料整備

これまでの活動として、東北大学における外邦図目録の刊行、お茶の水女子大学における外邦図資料の収蔵状況の改善とその目録刊行の準備、大阪大学による『国外地図目録』『国外地図一覧図』（国土地理院蔵）の複写物の作成について報

告した。

東北大学からは、外邦図資料の所蔵機関である博物館において利用の方向性が定められていない状況にあること、目録の作成をめぐるノウハウを提供する準備のあることが述べられた。

お茶の水女子大学に関しては、東北大学による目録を利用した場合における必要となる作業量の見通しについて報告があった。

今後の計画

目録の整備：東北大学による目録をベースとして、京都大学総合博物館所蔵図やお茶の水女子大学所蔵図の目録を作成する。また、その過程で、他機関（京都大学東南アジア研究センター、岐阜県立図書館世界分布図センター）に所蔵される資料との照会や、『国外地図目録』（国土地理院蔵）との関係を見る。

調査対象機関の選定および実施：調査が必要とされた機関として、インペリアル・ウォー・ミュージアム（英軍接收による資料）、レニングラード国立公文書館（関東軍関係の資料）のほか、海上保安庁（外邦図として印刷された海図）なども提案された。また、中央地理隊に所蔵される地図の扱いに関しても、その調査の緊急性が指摘された。アメリカ議会図書館に所蔵される外邦図関連の資料については、昨年度に引き続いて実施され、今年度は、長澤氏および今里氏によって、同館における空中写真の調査を行う予定である。

第4回外邦図研究会の開催：11月8日（土）9日（日）に東京で開催すること

とした。

(2) 第4回研究会

2003年11月8~9日、駒澤大学において開催され、以下のような発表がおこなわれた。

出席者（敬称略、五十音順）

浅井辰郎・飯塚隆藤・生田清人・井口悦男・石原 潤・今井健三・今里悟之・上林孝史・牛越国昭・内田忠賢・大槻涼・小澤知子・角田清美・加藤敏雄・金窪敏知・後藤慶之・小林 茂・斉藤克・坂戸直輝・佐藤 久・佐藤礼次・清水靖夫・鈴木純子・鈴木喜雄・関沢俊弘・高木 勲・高橋健太郎・武居裕子・谷屋郷子・田村俊和・田原 敬・天明耕一・中島義一・中野尊正・長岡正利・中村和郎・鳴海邦匡・西村三紀郎・芳賀 啓・長谷川孝治・原 裕子・久武哲也・深谷 元・細井将右・水谷一彦・三井嘉都夫・源 昌久・村山良之・矢沢正安・山近久美子・山村亜希・渡辺 正・渡辺信孝・渡辺理絵

<11月8日(土)>

13時30分より、「地理学サロン」との共催のもと、駒澤大学246会館6階会議室で開催され、以下のような発表が行われた。また、会場には、多田文庫（駒澤大学図書館地図室および地理学教室地図室所蔵）における外邦図資料の一部が展示され、中村和郎同大学教授の案内のもと閲覧した。

1. 金窪敏知（元国土地理院長）「終戦前後における参謀本部と地理学者との交流、および陸地測量部から地理調査所への改組について - 渡辺正氏資料をもとに - 」

外邦図について簡単な紹介があり、発表者と外邦図とのかわりについてふれられたあと、おもに渡辺正氏所蔵資料にもとづき、(1)1945年4月より参謀本部でおこなわれた「兵要地理調査研究会」、(2)第2次世界大戦終結時前後の陸地測量部と終戦にともなう地図の焼却、(3)陸地測量部から地理調査所への組織再編など、これまでほとんど知られていなかった外邦図に関連する基本的



写真8：中村和郎駒澤大学教授による開会の挨拶



写真9：金窪氏による報告

事実が示された。とくに「兵要地理調査研究会」は、差し迫っていたアメリカ軍との日本本土での戦闘に関連する問題を研究対象としており、当時の主要な地理学者が参加していた点は注目される。これによって形成された参謀本部の軍人と地理学者の関係が、終戦直後に参謀本部にあった外邦図の、各研究機関への持ち出しに大きく関与していることはあきらかで、今日大学等に残存する外邦図の移転のきっかけがほぼあきらかになった。また終戦直後の地図の焼却指令では、外邦図がおもな対象となっていること、陸地測量部から地理調査所への組織再編は、戦後復興にむけて、地図作製業務を軍から切り離すことをめざして早期に実現されたことも注目された。

2. 渡辺正氏の挨拶：質問と応答

上記発表で紹介された経過に、当事者として関与され、また関連資料をこれまで保管されてこられた渡辺正氏（東京都杉並区在住、元少佐、87歳）の挨拶、および回顧をお聞きした。なお、渡辺正氏



写真 10：渡辺氏による挨拶

の当時の回顧については、すでに『信濃毎日新聞』連載、「続占領下の空白、<地理調査所>物語」の第1回（1995年12月23日）～第5回（同12月29日）に掲載されている。この連載（全30回、1996年2月14日まで）を参加予定者にメール等でお送りしておき、話をうかがった。終戦当時の参謀本部の状況にはじまり、GHQによる地理調査所（1945年9月1日、陸地測量部を改変して発足、当時長野県に疎開中）の訪問調査（1945年9月下旬）の状況をくわしく紹介していただくとともに、陸地測量部の内務省移管と地理調査所の発足の経過、終戦前の兵要地理調査研究会についてもふれていただいた。

3. 中野尊正（東京都立大学名誉教授）「外邦図と私のかかわり」

中野教授は、すでにその著書『山河遙かに』（私家版、1990年、16頁）に、終戦後の1945年9月末（あるいは10月初め）に復員して、多田文男東京大学助教授（当時）の指示を受け、参謀本部にあった地図を研究用に運び出したことを記して

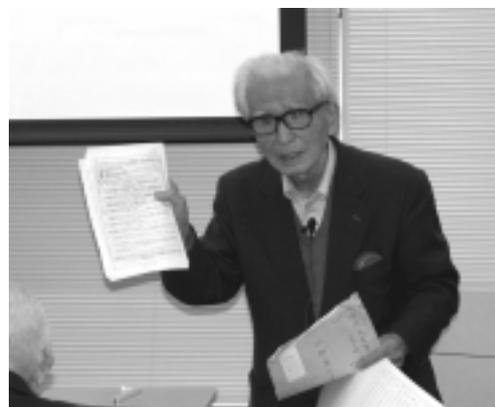


写真 11：中野氏によるコメント

いる。このときに運び出された地図は、最終的に資源科学研究所にもちこまれることになり、今日の大学所蔵の外邦図の主体をなすことになった(久武哲也「旧資源科学研究所所蔵の外邦図と日本の大学・研究機関等所蔵の外邦図との系譜関係」外邦図研究ニュースレター，1号[2003年]，15-20頁参照)。上記ではまた、「渡辺少佐」を市ヶ谷の参謀本部にたずねたことにもふれている。この「渡辺少佐」は渡辺正氏であり、同氏の研究会の参加をお知らせしつつ中野教授のご出席をお願いしたところ、表題のようなメモを事前にお送り下さり、このコピーを全員に配布してお話をお聞きした。

終戦にいたるまでの中野教授の体験、さらに渡辺正氏が満州で兵役についていた中野教授を参謀本部に出向させようとしたこと、さらに運び出し作業の実際(参謀本部から大妻学園、さらに世田谷の関戸氏宅)などを紹介され、外邦図の利用をうたえられた。

4. 三井嘉都夫(法政大学名誉教授)「私と外邦図」

中野教授とほぼ同時期に復員し、やはり多田文男東大助教授(当時)の指示により、参謀本部から地図を運び出した三井教授からもお話をいただいた。ご自身の経歴の紹介からはじまり、参謀本部にあった地図の状況、運び出し作業についてふれるとともに、最終的に資源科学研究所に運び込まれるまで、アメリカ軍の眼を避けて、大妻学園、金子材木店など各地を転々としたことを紹介された。資源科学研究所に運び込まれたあともし

ばらくはそのままで、1959年になってその本格的な整理作業が開始されたという。この整理については浅井辰郎「琉球諸島の地形図はどんな経緯でお茶の水女子大学に入ったか」(『大正・昭和琉球諸島地形図集成』解題、柏書房、1999年、23-26頁)を参照。



写真 12：三井氏による報告

5. 佐藤 久東京大学名誉教授のコメント

上記のような発表やコメントを聞かれた佐藤久東京大学名誉教授からコメントをいただいた。1944年当時東京大学大学院特別研究生であった佐藤教授は、陸地測量部の囑託として空中写真の判読



写真 13：佐藤氏によるコメント

に従事するようになり、1945年5月に長野県に陸地測量部が疎開してからも、ときどきそこを訪れていた。その際、すでに8月15日の終戦以前に、南方で撮影された空中写真のフィルムや空中写真測量による地図の原図を焼却していたのを目撃したという。また上記「兵要地理調査研究会」の最初の会合と記憶するが、参謀本部で辻村太郎東京大学教授(当時)および田中啓爾東京文科大学教授(当時)の講演会があったことを紹介された。さらに終戦後の1945年8月下旬に、佐藤教授は学生とともに参謀本部から日本の要塞地帯の地図を持ちだされたという。中国の5万分の1地形図や10万分の1地形図は精度が低く、それよりも秘図となっていた要塞地帯の地図に関心をもっていたということであった。

6. 浅井辰郎元お茶の水女子大学教授・日本地理学会名誉会員のコメント



写真 14：浅井氏によるコメント

さらに当日ご出席の浅井辰郎先生からもコメントをいただいた。上記「兵要地理調査研究会」には、辻村太郎・田中啓



写真 15: スピーチやコメントを頂いた方たちの記念写真(前方左より佐藤・浅井・渡辺・中野・三井・坂戸各氏、および後方左より高木・金窪各氏)

爾・多田文男など東京の地理学者の参加が多いが、京都ではそれより早い時点に軍（陸軍参謀高嶋大佐・間野少佐）と小牧実繁京都大学教授を中心とする地理学者との密接な関係が形成され、アジア各地の研究をおこなう組織があった（浅井辰郎「別技篤彦名誉会員のご逝去を悼む」地理学評論 70 巻 9 号[1997 年]、553-554 頁も参照）。「兵要地理調査研究会」を考えるに際しては、この組織との関係も考慮する必要を指摘された。

なお、この組織の活動については、1942 年から参加した故村上次男元甲南大学教授の記録がある（村上「日本地政学の末路」空間・社会・地理思想、4 号[1999 年]、50-56 頁）。またこの記録には、「昭和十八年になると陸軍からの要請で、武漢地方から四川盆地への戦略図を作成させ（ら）れた。この辺りの地形・歴史・産業などから総合的に判断して、それを図示するのである。参考の地図は航空機のための大きな多色刷りのものを提供された」（かっこ内引用者）というくだりがあり、作業に外邦図（航空図）が使用されていたことが推測される。



写真 16：懇談会の模様

この間、スピーチやコメントをいただいたシニアの方たちの記念写真（渡辺・浅井・中野・佐藤・三井・坂戸各氏にくわえ、金窪敏知氏・高木勲氏）を撮影した。新事実があきらかになるだけでなく、お互いに数十年ぶりに会われる方もあり、有意義な研究会になった

夜は付近の中華料理店で懇親会を開催した。渡辺正氏・浅井辰郎先生・三井嘉都夫先生を中心に外邦図を話題に懇親が進んだ。

<11 月 9 日（日）>

9 時 30 分より、駒澤大学第一研究館 1 階会議室で開催され、以下のような発表が行われた。そして、これらの報告の後に、今後の予定について打ち合わせを行った。また、前日に引き続いて、多田文庫における外邦図のうち、特に海図に関する資料の一部が展示され、中村和郎教授の案内で閲覧した。

1. 源 昌久（淑徳大）「兵要地誌作成過程に関する一研究：関東軍をとりあげて」

おもに関東軍に関連する兵要地誌の作成過程を『陸満密大日記』、『陸満機密大日記』により検討した。参謀本部第二部、関東軍司令部などの兵要地誌作成組織にはじまり、その作成マニュアル、さらに兵要地誌文献リスト（『兵要地誌資料目録月報』）と分析を進め、多数の文献が作成されたことを示した。また関東軍隷下の部隊が作成した兵要地誌を検討し、その内容を紹介した。



写真 16：源氏による報告

2. 坂戸直輝（元海上保安庁水路部）「第二次世界大戦中の機密図誌（海図・航空図）（1）」

外邦図のなかには海図や航空図などもふくまれているが、その研究はほとんどおこなわれていない。そうした観点からその機密図に焦点をあてて解説をお願いした。

まず、第2次世界大戦前から水路部に勤務されてきた経歴（坂戸直輝[2002]「海図に関する昭和の技術小史：水路部とともに歩んだ60年」地図，40巻2号，2-20頁，4号，22-39頁参照）の紹介からはじまり、水路部の位置、経緯度基点標、水路部の組織など基本的な事項にふれた



写真 17：坂戸氏による報告

あと、水路図誌・航空図誌の概説があった。つづいて機密海図の説明にはいり、その製図と印刷、あわせて暗号乱数表のことが紹介された。さらに水路部の空襲、疎開、敗戦についてふれ、そのごのアメリカ軍との関係、アメリカ軍への提出資料についても解説があった。末尾では、海象気象図・航空図・海陸兵要図についても解説していただいた。

なお、この発表は未完であり、次回の研究会でつづきをお願いする予定である。

<協議内容>

坂戸直輝氏の発表のあと昼食をとり、これまでの研究活動の報告と今後の研究計画について議論した。その内容は、以下に記す通りである。

報告

1) 国内の資料整備

これまでの活動として、東北大学における外邦図目録の発送とデジタル化の準備、お茶の水女子大学における外邦図の保存と整備、京都大学における外邦図目録の整備、大阪大学による『国外地図目録』・『国外地図一覧図』（国土地理院蔵）の複写物の電子化について報告があった。

東北大学については、昨年度に発行された外邦図目録の関係機関への配布が終了したこと、外邦図資料画像のデジタル化の作業を試験的に開始していることが述べられた。このデジタル化に関しては、地図をスキャンし

て、そのファイルを圧縮することを試みているが、調整が困難であり、試行錯誤の段階であることが報告された（村山良之氏より）。

お茶の水女子大学からは、所蔵する外邦図資料を購入したマップケースに収めたこと、岐阜県立図書館による資料借用の依頼のあったことが述べられた。そして、目録化の作業については、冬季・春季休業期間に実施する予定であることが報告された（内田忠賢氏より）。

京都大学に関しては、同大学に所蔵される外邦図の目録化作業をおおよそ終了したこと、その目録の発刊を2004年3月末までには印刷製本を終える予定であることが報告された（山村亜希氏より）。

大阪大学からは、『国外地図目録』・『国外地図一覧図』（国土地理院蔵）データの電子化を行い、それを関係機関へ配布する準備を行っていることが報告された（鳴海邦匡より）。

2) 海外の資料調査

今里悟之氏（大阪教育大）より、長澤良太氏（鳥取大）とともに9月に実施したアメリカ議会図書館（ワシントン）での、旧日本軍撮影空中写真（中国江北地区）の調査について報告があった。イギリスでは Imperial War Museum が外邦図を所蔵していること、またその閲覧の条件について、長谷川孝治氏（神戸大）より紹介された。

目録の整備：京都大学総合博物館所蔵図およびお茶の水女子大学所蔵図の目録を作成し刊行する予定。

調査対象機関の選定および実施：海外の外邦図収蔵機関（カナダの Western Ontario University、イギリスの Imperial War Museum など）および国内の外邦図収蔵機関（立教大学・明治大学・靖国顕彰会など）で調査をおこなう。

渡辺正氏蔵資料の刊行：高木勲氏より、渡辺正氏が所蔵される資料について、その概要と整理状況を報告していただいた。今後は渡辺正氏所蔵資料の整理に努力してこられた金窪敏知氏・高木勲氏を中心に、その編集・刊行に努力することとした。これには、田中宏巳氏（防衛大）・久武哲也氏（甲南大）・源昌久氏（淑徳大）がおもにあたることとした。

第5回外邦図研究会の開催：東京で2004年5月ころ第5回研究会を開催することとした。

シンポジウムの開催：2004年度の日本地理学会秋季学術大会（広島）において外邦図をテーマとしたシンポジウムを開催することが提案された。

ニューズレター2号の発刊：2003年度における活動の報告として、ニューズレター2号を発刊することが決定された。

その他：今後の大きな課題は外邦図の活用で、その実例や問題点を検討していくこととした。

2003年度における研究の概要

(1) 研究実績の概要

今後の計画

国内の資料整備

昨年度刊行した東北大学理学研究科地理学教室蔵の外邦図目録を関係機関に配布した。

東北大学理学研究科地理学教室蔵の外邦図の試行的デジタル化を開始した。

京都大学文学研究科地理学教室蔵の外邦図（総計 13,495 枚）の目録を作成した。これについては平成 16 年度に刊行する予定である。

お茶の水女子大学地理学教室蔵の外邦図目録の作成を継続した。

大阪大学文学研究科人文地理学教室では、2003 年度に購入した空中写真要図などにつき目録を作成した。これらの資料については、昨年度購入した兵要地誌図と同様、1 点ずつ中性紙封筒に入れて文書保存箱におさめ、その保存にも考慮した。

大阪大学文学研究科人文地理学教室において、国土地理院蔵の外邦図目録である『国外地図目録』全 4 巻および『国外地図一覧図』全 4 巻の複写資料について、電子資料化（主として PDF ファイル）を行い、その関係機関への配布を一部はじめた。

海外の資料調査

2003 年 9 月に、長澤良太氏（鳥取大学）と今里悟之氏（大阪教育大学）がアメリカ合衆国の議会図書館に出張し、昨年度発見した日本軍撮影の空中写真 2,100 枚のうち、723 枚のスキャニングを行った。

2003 年 8 月に長谷川孝治氏（神戸大

学）がイギリスに別の調査で出張した際に、British Library 以外の外邦図所蔵機関である Imperial War Museum での閲覧条件を確認した。

研究会の開催

外邦図を所蔵する大学で 2 度の研究会を開催した。

2003 年 6 月 28 日～29 日、京都大学京大会館、総合博物館地図室で第 3 回研究会を開催した。発表は、長岡正利氏（元国土地理院）、田中宏巳氏（防衛大）、渡辺理絵氏・小林 茂（大阪大）、堤 研二氏（大阪大）、源 昌久氏（淑徳大）が担当した。また、京都大学東南アジア研究センター、文学研究科地理学教室蔵の外邦図を見学した。

2003 年 11 月 8 日～9 日、駒澤大学で第 4 回研究会を開催した。終戦前後の外邦図に焦点をあて、金窪敏知氏（元国土地理院長）の紹介のあと、渡辺 正氏（元参謀本部）、中野尊正氏（東京都立大学名誉教授）、三井嘉都夫氏（法政大学名誉教授）、佐藤久氏（東京大学名誉教授）、浅井辰郎氏（元お茶の水女子大学教授）など当時の関係者の証言を聞いた。また、海図については、坂戸直輝氏（元海上保安庁）の発表があったほか、源昌久氏（淑徳大）による報告もあった。くわえて、駒澤大学所蔵の外邦図を見学した。

ニューズレターの刊行

本研究参加者以外の方々や外邦図所

蔵機関に対し、今年度得られた知見を報告するため、冊子（『外邦図研究ニュースレター』No.2）を刊行した。ちなみに、昨年度発行の『外邦図研究ニュースレター』No.1については、全国の関係機関（大学の地理学教室や外邦図所蔵機関など120ヶ所以上）への発送を行った。

そのほか

日本国際地図学会平成15年度定期大会（於沖縄、7月）に小林 茂（大阪大）らが参加し、本研究の成果の一部を報告した。

大阪大学文学研究科人文地理学教室は、同大学総合学術博物館 第2回企画展「ジグソーのピースを探して - 調和と共生 -」（2003年10月8日～13日）に参加し、「近代地図作製をめぐる中国と日本 - 技術移転と秘密測量 - 」と題する展示を行った。

文責：小林 茂・鳴海邦匡